
やる気ゼロの勇者物語

素人駄作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やる気ゼロの勇者物語

【Nコード】

N6189N

【作者名】

素人駄作者

【あらすじ】

国王と地の文の心の底からのシャウトにより魔王討伐の旅に出た勇者。

しかし、彼には魔王を倒す気も世界を救う気も全くなし！
そんなやる気ゼロの勇者のお話。

第0話 プロローグ（前書き）

みなさんはじめまして。

全くの素人で文才のない馬鹿野郎がいきなり連載小説とか・・・。
それでは、はじまり～はじまり～

第0話 プロローグ

プロローグ

世界は闇に包まれていた。

今から一年前、この地に魔王が君臨した。

魔王は大勢の魔族を引き連れ、世界の中心ともいえる王国を我が物とした。

周りの国も飲み込まれ、瞬く間に魔王の国はその領土を広めていった。

それにより、世界は魔王の国を中心としていった。

魔族は我が物面で道を歩き、人々はどんどん肩身の狭い思いをしていくこととなった。

もうこの地に人々が安息して暮らしていける地などなくなっていた。しかし、闇に包まれた世界に光の希望ともいえる有る言い伝えが広まっていった。

【黒いマントを風になびかせ、見たことのない剣を腰にさし、闇に染まりきったこの世界を渡り歩き、その闇を浄化する者がいる】

人々はその者を 勇者と呼ぶ。

「マジでだるい、もうだるすぎて死んじゃうよ」 てか、いつそのこと死んで楽になりて」 マジ魔王討伐とかだるいんですけど」
何がだるいって・・・例えんのもだり」よ」と、黒いマントを風になびかせ、見たこともない剣を腰にさした少年が先ほどかから愚痴りまくっている。

・・・

魔王を倒す気ゼロの勇者は今日も愚痴りながら、旅を続けている。

第0話 プロローグ（後書き）

すみません。

なんだこれ？って感じですね。

これで全力なんです。

これはひどい

評判があまりにも悪かったら辞めたいと思います。

では

さよなら

よかったら、また見てください。

第一話 始まらない物語（前書き）

ブログ見てちよつとでも興味を持ったか見てくださった皆さん
こんにちは。

え？別に興味を持ったとかじゃなく、ただ冷やかしに来た？
全然かまいません！

冷やかしだろうと、あらしだろうと、来てくれたならそれだけで感
謝です。

それでは

はじまり〜はじまり〜

第一話 始まらない物語

とある王国にあるお城の中

「今や魔王軍に支配されていない国は数少ない、わが国もいつ攻められるかわからん。今のこの国の軍力では、到底魔王軍には敵わない、だから攻められてからでは何もかもが遅いのじゃ。いち早く魔王を倒さねばならないのじゃ。どこかの国が、どこかの英雄がなどの、他力本願では魔王は倒せん。お願いできるね。我が国最強の騎士、ゼロ君。君になら。」と、先ほどから神妙な顔つきで語っているこの老人は、この国の国王である。

そして、国王の話に何一つ動じず黙って話を聞いている少年。彼の名は、ゼロ・ペンドラゴン。彼は、若干十七歳にして王国最強の騎士といわれており、彼の戦う様には一部の無駄もなく、まるで舞台劇を見ているようだと言われている。

この国は幸いにも魔王軍の本拠地には遠く離れた場所に位置する為、これまでに魔王軍に攻められることはなかった。しかし、国王の言う通りいつ攻められてもおかしくない状態なのだ。

そこで国王は、王国最強の騎士率いる魔王討伐隊を結成しようと思いついたのだ。彼程の強い騎士が率いる軍隊であれば必ずや魔王を討取ってくれるそう願ひ、今こうして彼に国王が直々をお願いをしているのである。

彼はうつむいていた。

無理もないだろう。いくら最強と呼ばれていても彼はまだ十七歳の少年だ。相手はあの魔王だ。たったの半日で王国を潰した者だ。そんな相手と戦って来いと言われ。はい、わかりましたと即答する者などいるわけがない。

「わかっておる。私がどれほど酷いことを言っているかは、君はまだ若いのだ、魔王軍に挑むなど人生を無駄にする行為に近い。」

国王は優しい人間なのだろう、本当につらそうに言った。「それでも、この国に魔王を倒すことのできる可能性があるのは君しかないのだ。お願いだ。」国王は頭を下げた。身分や名誉や地位、そんなくたらないものは全て捨てただただ、頭を下げた。

場に沈黙が訪れる。

彼はまだうつむいている。

国王が頭を下げたことに驚いたのか、少し彼は動いたが。しゃべりだそうとはしなかった。

沈黙が訪れて五分

彼はまだうつむいている。

無理もないだろう。魔王に挑むか否かをそんなすぐに返答出来るはずがない。

沈黙が訪れて十分は経っただろうか、彼はまだうつむいている。

沈黙が訪れて三十分・・・。

沈黙が訪れて一時間・・・。

沈黙が訪れて「いや！もーいいから！どんだけ悩んでんの！さつきから何回沈黙が訪れて！使うの！行数稼ぎもいいとこだよ！確かに悩むのはわかるよ。けど早く選択してもらわないと先に進まないから。てか、さつきから私と地の文だけで君一切しゃべってないよ！小説なんだから何もしゃべんないといないと一緒だから。マジで！」なかなかしゃべりださない彼にしびれを切らし突っ込みまくる国王、つてかなにお前も地の文とか小説とか言ってるの？マジそうゆうのやめてくれませんか？今までめっちゃシリ阿斯だったのにいきなりコメディーじゃん。この小説は異世界冒険ファンタジー小説だよ。面白コメディー小説じゃねーんだよ。わかった？次、世界観壊す様な事言ったらマジボコすかな！リアル校舍裏だかな！覚えたけよ？・・・。

さて、さつきから悩みまくっている彼はとうとう口を開いた。

「・・・。」

口を開いた！

「・・・。」

え？絶対遵守のはずの地の文無視？

おい。

「・・・。」

返事がない。ただの屍のようだ。

「・・・。」

突っ込みすらなし？

「・・・。」

おい！しゃべれよ！マジで！ホントしゃべって下さいよ。お前主役じゃん！主役がしゃべれない斬新な小説なんか俺書けないよ？

「・・・。」

何でしゃべんないの？しゃべれない設定なんかにしたおぼえないよ？

「スースー」

スースー？まさか！

主人公は人の話を全く聞かず寝ていた。

・・・。

やる気ゼロの勇者の旅はまだ始まらない。

第一話 始まらない物語（後書き）

くだらなく駄文を読んでくださってありがとうございます。

第一話なのに主人公しゃべったの「・・・。」と「スースー」だけです。ってか、はたしてあれはしゃべったというのか疑問ですけど・・・。

次回にはたぶんしゃべります。

それでは

さよなら

第二話 却下！（前書き）

はじまり〜はじまり〜

第二話 却下！

とある王国にあるお城の中

今この場には、一人の老人と一人の少年以外誰もいない。

老人の方はこの王国の国王。

少年の方はこの王国最強の騎士。

なぜ二人が話しているか、それはこの地に君臨する魔王をどうか討伐してくれないだろうか、と国王が直々に彼に頼んでいるからである。

ギャグパートかシリアスパートかと問われれば、間違いなくシリアスパートの状況だろう。

だが・・・。

少年は居眠りをしていた。器用にも立った状態で。

「・・・。」

国王は優しい人間だ。民の為を第一に考え、民の為になることをしようとする。

決して私利私欲のために自らの力をふるわない。

しかし。

さすがにキレた。

「何寝てんの！？それでも私一国の王だよ！その王の前で居眠り！？今までめちやくちやシリアスだったのに、いつきにだらけたよ！

！」と、国王は思いのたけをシャウトした。

「・・・。」

「え？まだ寝てんの？あんだけ大声でシャウトしたのに？もーこれ居眠りのレベルじゃないよ、熟睡だよ。なに国王の前で熟睡してんの？」

「・・・。」

「え？まだ起きないの？そろそろ私でもマジギレだよ？ぶん殴るよ

「?あと三秒で起きなきゃマジ殴るよ?」

「・・・。」

「マジ殴るかな?本気だかな?はい、いゝゝち!やばいよやばいよ。死のカウントダウンが始まっちゃったよ」

「・・・。」

「はい、にゝゝい」

「・・・。」

「さゝゝn」「うるせんだよ!死ね!!!!」

「へ?」

「へ?じゃねーよ!うるせんだよ!こっちは気持ちよく熟睡してたのよ、さっきからうるせーんだよ。死ね」

「は、はい。すみません。」

「わかればいいんだよ。わかれば。で、話って何すか?」

「いや、勢いに負けて謝っちゃたけど、君が寝てたのが悪いんだよね?なにその態度」

確かに国王の言う通りである。明らかに彼が悪いにもかかわらず、彼はまったく反省をしていない。それどころか、逆切れである。何こいつ?本当に主人公?

「うせーな。ちよつと熟睡したくらいでキレんなよ。で、何の用だよ?何にもないなら帰るけど?」

「やはり今までの話は全部聞いていなかったのか・・・。」
あきれる国王。無理もないよね。

「君には魔王討伐隊の騎士団長になつてもらいたいのじゃよ。やつてくれるかね?」

「却下」

「即答!?」

まさに即答だった。国王が言葉を言いきつて即行だった。

「そんな、もう少し考えようよ。断るにしてももつと間をおこうよ。」

「いや、だってめんどくさそうじゃん。そういうの」

あまりにもひどい理由だった。

恐怖とかそういうのではなく、ただめんどいから。だから彼は断ったのだ。

「第一何で俺なわけ？」

「君はこの国最強の騎士じゃろーが、君が選ばれるのは妥当だろ。」

「何その設定？ふざけんなよ。何だよ王国最強の騎士って、そう言うのマジだるい。」

彼は王国最強の騎士として有名だが、王国一騎士らしくない騎士としても有名なのだ。

彼の強さは本物だ。彼一人で一国に匹敵すといわれるほどだ。しかし、それは彼が本気を出した時に限る。彼は基本的本気を出そうとしない。いや、それ以前に戦おうとすらしないのだ。国王も断られるんじゃねーかくらいは思っていた。が、まさか即答されるとは思わなかつし、しかも断る理由がめんどくさいとは……。

「そう言うわけなんで俺帰りますね。」

「ちょ、ちょっと待つてくれ！」

それでもここで帰られるわけにはいかない。魔王を倒すには彼の力は必要不可欠なのだ。

自分がどれほど横暴かはわっかている。だからと言って諦めるわけにはいかない。

「お願いじゃゼロ君、すでに魔王軍の支配力は世界一だ。どの王国ももう魔王軍と戦うことは諦めかけている。だからこの王国をさらには世界を救うには君の力が必要なんじゃ。頼む！どうか私たち人間を救ってはくれぬか！？」

国王は地にひれ伏した。もう彼しかこの国が魔王軍に対抗出来なのだ。彼が最後の頼みなのだ。国王の必死の頼み。それを彼は……

「嫌です。」

……断った。

……。

やる気ゼロの勇者はやっぱりやる気なかった。

第二話 却下！（後書き）

この小説ジャンル冒険なのになかなか冒険が始まりませんね……。いやでもいいんじゃない？

冒険物語がなかなか冒険しないっていうのも斬新で！

・・・なのかな？

というわけで

では

さやなら〜

第三話 ドラクエとFFはやっぱり面白いよね。あ、あとクロコ(前書き)

今回は勇者がかなりしゃべります。

はじまり～はじまり～

第三話 ドラクエとFFはやっぱ面白いよね。あ、あとクロン

とある王国にあるお城の中

国王が土下座をしている姿というのを想像できますか？できない？頑張って想像して下さい。

だって現に今してんだから。

もしあなたがその国の騎士で、国王に土下座までしてクエストを依頼されたらどうしますか？

え？引き受ける？でも実際にされた騎士は断りました。

そんな奴が主人公だと思えますか？

思えない？でもそいつが主人公です。

・・・

「こうして物語は幕を閉じた。」

「勝手に終わらせるんじゃない！しかも始まってすらない！」国王はシャウトした。

そりゃそうだ。自分は国王だ。その国王が土下座までした。それなのにたったの「嫌です。」の一言で断られたのだ。叫びたくもなる。ってか、マジでなに勝手に終わらそうとしてんの？この小説ジャンル冒険だよ？まだ冒険してないからね。冒険小説ですとか言っておきながら、地の文と国王がだらだらしゃべってるだけだから。エリア移動すらしてないから。

最初の書き出し第一話からずっと【とある王国にあるお城の中】だから。

【ある森の中】とか【魔王城の最深部】とか書いてーんだよ！

何ですっと同じエリアにいの？ねー、マジホント！いい加減冒険してくんない！？

と、地の文もシャウトした。

「うるせーな。二人して叫んでんじゃねーよ。わかったよ。そんなに言うなら行ってやるよ。バラモスだろうがゾーマだろうが、なんならラヴオスだって倒してやるーか？」

「そ、それは本当か!？」

「あー、行ってやるよ。」

国王と地の文の心の叫びが通じたのか、あのやる気ゼロの騎士がやと冒険をするといってくれた。

さすがは主人公である。なんやかんだ言ってやってくれるのだ。

国王なんてあまりの嬉しさに、「いや、ラヴオスは魔王じゃねーよ!」と突っ込み忘れている。

「じゃつ。ちよつくら行ってきますは。」

彼はそんなことを言ってこの場から立ち去ろうとした。

「いや、ちよつくらって!何それ!?近所のコンビニに行くんじゃないんだよ!？」

ラヴオスは突っ込み忘れたが、今の【ちよつくら】という言葉には引かなかったのか我に帰り突っ込み始めた。

「まさかとは思うが・・・」

国王は言葉を切った。

そして彼を上から下とよく眺めてから言葉をつなげた。

「その格好で行くつもりではないよね？」

彼は国王に言われ疑問に満ちた顔つきになった。

無理もないだろう。別に彼は奇抜な格好をしているわけではなく、いたって普通の格好なのだ。

「何言ってるすか?当たり前じゃないですか。この格好変ですか?」

「いや、変じゃない。むしろ全然普通の格好だ。けどね・・・」

国王はまたも言葉を切った。

彼は意味がわからなかった。別に普通の格好だ。

上はワイシャツにノースリのジャケット。下は黒いパンツだ。

「普通の格好じゃだめだよな？君、騎士だし。ここ城の中だよ。今まで突っ込まなかったけど、騎士である君がその格好じゃだめだよな？ちゃんとフル装備しなきゃだめじゃん。私、国王だよ？失礼だよな？」

本当に普通の格好だった。私服感丸出しだった。しかもワイシャツは第二ボタンまで開け、ジャケットは前を閉めずと言うラフさ。重要な話があると事前に聞いていたのにもかかわらずだからね？彼は相手が国王だろうとなんだろうと気にしない。

ある意味ホントに王国一最強の騎士だ。

「君、ホントに魔王倒す気ある？他校に攻めに行くんじゃないんだよ？喧嘩じゃないからね。」国王はあきれながら言う。

「わかってますよ。今、俺学ランじゃないじゃないですか。」

「絶対わかってないよね？なに？マジでその格好で行くつもりなの？装備なし？」

「問題ないでしょ？どうせ世界征服とか企んでる厨二野郎でしょ？大したことありませんよ。第一、魔王とか今時そんなの名乗る奴とかドラクエくらいにしかいませんよ？所詮ドラクエなんで、老若男女誰でもやり込めるようになってますし。基本、俺は魔王を倒しに行くのじゃなく、倒し終えて全キャラLv100にするくらいやり込みまくる方が好きですから。気が付いたら全員勇者ですよ？ストリーなんて買って三日持てばいい方ですよ。」

「何の話してんの？」

「ですからやっぱりストリーを楽しむにはFFですね。あれはホント奥深いっすもん。でもなんか最近のは映画みたいなんすよね。ムービーが長い長い。確かにあれはいいんですけど……。なんて言うんですか？きれいすぎみたいなの？水清ければ魚棲まずみたいな感じ？だから絵は鳥山明くらいがちょうどいいんですよ。それ言うとかロトリガーは良かったすね。まさか魔王も仲間に出来ると

か、衝撃でしたし。それに・・・」

「うん、もういいから。もう君の好きなようにして。」

「じゃー好きにしますね。行ってきます。」

「ちょ、ちよつと」

「なんすか？」

「なんすか？じゃないよ。君、武器持ってないじゃん。」

「いらねーだろ。」

「いや！さすがに武器はいるでしょ！どうやって魔王倒すの？」

「喧嘩に武器を持ち込むなんて三下のすることです。」

「やつぱわかつてねーし！だから喧嘩じゃねーから！ハァ。ホント君と話していると疲れるよ・・・。」と、誰が見ても疲れていることが分かるような疲労感いっぱい顔をした。しかし、表情を変え国王は彼にあるものを授けた。

「何すかこれ？剣？にしては細いですね？刃も片方にしかないし・・・。」

「それは【刀】というものだ。」

「カタナ？聞いたことのない剣ですね。」

彼に授けられた剣それは刀だった。読者のみなさんはフツーにわかるかもしれませんが、この世界は剣と言ったら両刃の真っ直ぐなものがフツーなので知らないのも無理はない。

「そうじゃ。王国一番の鍛冶屋に作ってもらったものだ。鉄をも切り裂き刀身に魔力を込めてあるため絶対に刃こぼれしないという相当な業物だ。」

「じゃー相当高く売れますね。ありがとうございます」

「なに売ろうとしてんの！？」

「これで旅費を何とかしろってことじゃないんすか？」

「そんな回りくどいことはせん！旅費は別に出るから。それと、もう君以外の騎士は集まっているから。まずは騎士団長としていまk」

「は？俺以全員集まってるってどういう意味ですか？」

「そうか。君、最初の方寝てて聞いてなかったんじゃな。さすがに

君が王国最強の騎士といっても一人では無理だろう。だから」「何言ってるんですか？」

「は？」

「魔王なんて俺一人で余裕ですよ？なめてんすか？」キレル騎士。

「な、何を言ってるのだ！そんなのm」「テメー馬鹿にすんなよ？俺がちよつと本気さえ出せばバラモスだってゾーマだって余裕なんだよ！一回ゲームクリアしたらやるだろ。勇者一人旅。いっとくけど、一人旅だとメツチャ経験値貰えるかな。だから魔王城着くころにはレベルが尋常じゃないことになってるかな？ただ弱点としては寝たりすると起こしてくれる奴がいらないからフルボッコになるけど。」

彼は基本やる気は人一倍無いが、意地も人一倍だ。なめられたり、負けたりとか、そう言うのが大っきらいなのだ。【吾輩の辞書には敗北という字はないのだ。もしあつたらそんな辞書は燃やしてやるさ。】というくらいの負けず嫌いだ。

「何を言ってるんだ！？君は！君はまるで魔王の恐ろしさを知らんか」「とにかく！」「

「俺は一人で行くからな。勇者一人旅だ。そういうわけだから。今度こそ行くぞ。」

そう言って彼は国王の返事無しにドアを開け部屋から出て行ってしまった。

・・・

やる気ゼロの勇者の勇者一人旅がやっと幕を開けた。

第三話 ドラクエとFFはやっぱり面白いよね。あ、あとクロロ（後書き）

やっと冒険が始まりましたね。
最後の最後でやっと・・・。

それはさておき

この小説の主人公ゼロ君ですが、
三話目にしてやっと彼がどんな格好をしてるかわかるという事態が
起きてます。

大変よろしくないですね。

最初の方で彼がどんな感じのキャラなのかという説明文がなく、今
さら彼がどんな奴なのか説明するっておかしくね？

というさまざまな理由で彼の見た目が全然想像できない・・・。
ということ

【みてみん】というサイトに絵を貼りました！

しかし、ここで問題が発生した。

「俺、絵ヘタじゃん」orz

別にヘタでもいいよという心優しい人は見てみれば感激です。

なんかダラダラとすみません。

そでは

さようなら

第四話 チート

森の中

森は荒れ果てていた。

木は枯れ大地は痩せこけ生き物たちはほとんどが死に絶えた。魔王のせいである。

空気中には微弱ながら魔力が含まれている。

これを【マナ】というのだが、これは本当に微弱なもので全く害はない。

しかし、魔王がこの地に君臨してからというもの空気中のマナは増え続けている。これは、魔王が魔力を無意識化に放出しているためである。

魔王は息をするのと同じように辺りに災厄をまきちらし、瞬きをするのと同じように生命を殺す。

空気中のマナの増加により世界は変わり始めた。

生き物は次々と死んでいき、空からはきれいに輝く太陽は消え、瞬く間に死が広がった。

そんな、絶望が支配する闇の世界を、その元凶である魔王を倒そうと旅に出た一人の勇者が森の中を歩いていった。

黒いマントを風になびかせ、見たこともない剣を腰にさした少年。

彼の名は……

ゼロ・ペンドラゴン

若干十七歳にして極東に位置する王国の最強の騎士といわれている。彼以外に勇者にならなマジでだるい、もくだるすぎて死んじゃうよ

「てか、いつそのこと死んで楽になりてゝマジ魔王討伐とかだるいんですけど」何がだるいつて・・・例えんのもだりゝよ」りえる者は、腐るほといそうだ。

え？何？ホント。こいつ自分が主人公だつて自覚ゼロ？せっかく俺がカツコよく行こうと思った矢先にこれかよ。マジいい加減にしてくれませんか？

「うるせーな。ネチネチネチネチ。姑かテメーは？」

なに普通に地の文に突っ込み入れてんの？

「だめ？」

いいわけないよね？これジャンル冒険だよ？

「でも、キーワードのところにコメディーってあるぞ」

そ、それは・・・少しでもキーワードを多くすれば検索でヒットしやすくなって、見てくれる人が増えるかなー、ってか増えてほしいなーと思っただけで、決してコメディー路線を目指しているのではなく、基本は冒険者なの！

「考えがあざといな」

う、うるせー！

悪かったな！どうせ今だ感想・評価が0だよ！

まだ投稿して日が浅いからとか自分に言い聞かせて、なんとか泣きださないくらいまでに保ってる状態だよ！

あ、やべ。泣きそ。

「こうして物語は幕を閉じた。白髪野郎の次回作に期待！」

なに勝手に終わらせてんの！？

「いいじゃん。ほら文の一行目見てみな」 とある王国にある

お城の中】から

【森の中】に変わったじゃん。エリア移動できたじゃん。夢が叶ったじゃん。

それでもうよくね？」

よくねー！！！！確かに言ったよ。エリア移動したいって。

けど、それが全てじゃないから！この小説の最終目的魔王討伐だか

ら！エリア移動じゃないから！

「もいいよ」 魔王討伐とか、そう言うだるいのはもつと正義感の強い勇者にでもやらしとけば。俺に正義感とかやる気とかを求められても困るんで。タイトルよく見るよ。やる気ゼロの勇者って書いてあんだろ。ホント魔王討伐とか、だるきこと山の如しだから。魔王とか、倒したら負けかなって思ってるんで。」

やる気ゼロどころじゃないよね、もうマイナスくらいまで行ったよね。やる気の炎零地点突破だよ。某主人公が必死の訓練で手に入れた技を標準装備だね。すごいや。あれゝ気のせいかな字がちよつと違うぞ。」

「うるせいなゝ 魔王倒せばいいんだろ。わかったよ。サクと倒してやるから、ぐちぐち言うな。」

サクツとつてさゝそんなスナック菓子感覚で魔王倒せると思ってんの？

「俺を誰だと思ってんだ？言つたら？バラモスだろうとゾーマだろうと、俺に言わせてもらえばスライム同然だ。」

へゝ。さすがゝ。じゃー後ろにいるデツケーくまみたいのもスライム同然だね。

「は？」

彼が振り返った先にはくまみたいなのがいた。

だが、大きさが明らかにおかしい。パツと見ただけでも3メートルはありそうだ。

しかも、一匹ではない。数十匹はいるであろう。彼の周りはすでに

くま くま くま。

「冗談きついで。最初に出てくるモンスターはスライムがお約束だろ。周り一帯くまだらけじゃなーか。」

もうこれは、リアルモンスターだ。スライムとかドラキーとかあんなかわいいもんじゃない。旅をはじめていきなり中盤のボスみたいなやつ（大群）に出くわすとは、ついてませんね。これはリアルにゲームオーバーじゃない？

「なめんじゃねーよ。さっきも言ったる・・・」
その時、一匹のくま（推定3メートル強）が勇者に襲いかかって来た。

そして・・・

・・・くまが真っ二つになった。

「・・・バラモスもゾーマも、馬鹿みたいにデカイくまも俺にとつたらスライムと同じだ。」

数分後

先ほどと変わらず辺り一面はくまだらけだったが、先ほどとは違う点が一か所・・・。

全てのくまが死んでいる。

・・・。

やる気ゼロの勇者はチートなくらい強かった。

第四話 チート（後書き）

彼かつたるいとかだるいとか言ってますが、
彼の旅はまだ・・・

数時間くらいしか経ってません。

国王に言われちゃっちゃんと支度して、

その日のうちに王国出て、

数時間くらい森の中を歩いてたら・・・。

みたいなのが今回のお話です。

基本やる気ゼロなんで疲れる事とか嫌いなんです。
彼は。

やっと冒険者ぽくなってきましたね。

これからどんどん冒険物にしていきたいと思います。

それでは

さようなら～

第五話 腹減った！

森の中

たとえどれほど強い者であろうと

その者が人である以上

絶対に逃れることのできない生命の危機が有る。

それは・・・

「やべー 腹減って死にそう・・・。」

飢えである。

彼はなんと朝、トースト一枚食べてから何も食べてな・・・。

別に大したことなくね？

飢えとか言って昼飯抜いただけじゃん。

あと、もうひとつ言わせてもらうとなんで食料とか持ってこなかったの？

「だって荷物とか重いじゃん。

クソー失敗したな！。

魔術師とか格闘家とかはいらないけど、荷物持ちと料理人はパーティーに加えておくべきだった。」

いや、おかしいから。パーティーに荷物持ちと料理人はおかしいから。第一、魔王討伐の旅が一日で終わると思ってるの？

まさか【 魔王城 】で最初に書くことで途中の旅をすっ飛ばして、いきなり魔王戦とか思ってたの？

「思ってた。」

思ってたんだ。思ってたやがったんだ。思ってたやがったな。クソ野郎。無理だから。

そんなこと無理だよ。

「なんでだ？」

フツーに考えてわかんない？最初に国王と地の文がだらだらしゃべ

つてたら、いつの間にやら魔王城でおかしいと思わない？超展開すぎじゃん。

「いいんじゃない。一つや二つそんな小説があっても。」

あつてもいいかも知れないけど、少なくとも俺はそんな小説書きたくない。

「わがまま言うなよ。」

てゆーかマジ腹減った。

お前、作者権限で俺の前においしそうなメシ出せ。

こっ『突然勇者の前においしそうなご馳走の山々が現れた。』みたいな文書いて。」

お前の方が明らかにわがままだよ。自分の空腹を満たすためにこの小説の世界観を潰そうとしてるよね。

おかしいから。

目の前にいきなりご馳走とか、どう頑張っても違和感Maxだから。

「何とかしろよ。俺はもう腹の虫が鳴くどころじゃないんだよ。」

もう断末魔の叫びだから。

さつきから腹の虫どもギャーギャー叫びまくってるから。」

わかったよ。しょうがないな。

じゃー・・・。

なんか牛みたいなモンスター登場させるから、そいつ倒して丸焼きにでもして食べて。

言つとくけど今回だけだからな。勇者が腹すかすたびに牛みたいなモンスター出てくるって言うのも不自然だから。

今回限りの特別だぞ。

勇者の前に突然牛のようn「ちょっと待て」
なに？

「丸焼きと言つても、俺は今火を起こせるようなものねーよ。」

だったら魔法とかで火起こせばいいじゃん。

「は？何言つてんの？俺、魔法なんて使えねーよ。」

え？嘘？マジで？

「マジ」

マジかよー

お前どうすんだよ。勇者だけが使える的な魔法出せないじゃん。ふざけんなよ！俺がどれだけ考えたと思ってるの？

どんな感じにしょーかなー。とか

やつは名前はカツコイイ方がいいよなー。とか
めっちゃ考えたんだぞ。

「しらねーよ。いいからなんか食いもん出せ」

火起こせないんなら、牛の刺身でも食ってれば？ 拗ねてる。

「ふざけんなよ。」

血抜きもしてねー肉を生で食ったら腹壊すにきまってんだろ！
刺身ならそうだな・・・。

あれだ！

なんかデカイイカみたなの出せ。俺、イカ好きだし。」

いや、イカ好きだしじゃねーよ。

ここ森の中だからね。

最初の行にも書いてあるじゃん。

森にイカはおかしいから。

「うるせーなー」

かたいこと言うなよ・・・。ん？」と、突然歩きだすぜ口。
え？どうしたの？

「今、かすかだが、何かおいしそうな匂いがした。

どこかに小屋かなんかがあって、そこに住んでる奴が料理をしてるんだ。

そうに違いない。」

おいしそうな匂い？でも、ここ森の中だよ。そんなまさかと五分ほど歩くと、確かに小屋が見えてきた。

ってか、スゲー。マジだったよ。

でもどうすんの？

人は住んでるっぽいけどまさか突撃なんじゃ「失礼しまーす。」

しちゃったよ。

突撃しちゃったよ。

しかも、ものすごいドアをガンガンガンたたいてるし。
やばいよ。

こんな山の中に住んでるような人だからたぶんスゲーマッチョなターザンみたいな奴だよ。

そんなドア叩くなよ。

絶対やばいから。

うるせー！とか言って斧持って出てくるから。

ターザン斧持って出てくるか」「はい。どちら様でしょうか？」
といって出てきたのは

見た目中学生くらいのかわいい女の子だった。

・・・。

女の子！？

ターザンじゃなくて！？

そんなターザン改めかわいい女の子に彼が言い放った第一声は。

「うまそうな匂いに釣られてやって来た。腹が減ってるんだ。飯を
食わせろ。」

・・・。

やる気ゼロの勇者はまるで盗賊のようだ。

第五話 腹減った！（後書き）

第六話目にして

やっと。やっと。

女の子が出てきました！

長かった。

実に長かった。

これでこの小説にも少しは萌えな感じが出るといいな
やっぱ重要ですね。

萌えは！

ということで

次回よりいよいよ

【イエーイ女の子だ！

あんな事そんな事

はたまたこんな事まで起きるかも？】編突入です。

されでは

さようなら！

第六話 選択肢にあるものだけが正解とは限らない

森の中

辺り一面は暗くなり、森の中はさらなる闇にのまれる中

勇者は・・・

腹をすかせていた。

森の中というのにもかかわらずブーツ

旅だというのにもかかわらず手ぶら

昼飯抜き

モンスターとの戦い

地の文との口論

その他もろもろの事情で彼の腹の虫は鳴くレベルを超え、断末魔の叫びだった。

そんなとき

突然、どこからともなくいい香りがしてきた。

その匂いをたどると、森の中だというのに小屋が見えてきた。

彼は、突撃隣の晩御飯作戦を決行。

中から出てきたのは・・・

小さな女の子だった。

年は中学生くらいだろう。

藍色のショートな髪とつぶらな瞳

その色を際立たせるような白い肌。

とてもかわいらしい女の子だった。

そして

そんな女の子に彼が放った第一声は

「うまそうな匂いに釣られてやって来た。腹が減ってるんだ。飯を食わせる。」だった。

「え？えつと……。はい？」戸惑う女の子。
そりゃそうだ

いきなり飯を食わせるとか傍若無人以外言い表す言葉がない。
お前はどこのジャイアンだ！と、突っ込んでやりたい。

頑張れのび太！いや、女の子だからのび子か？

ジャイアンに負けるな！

「えつと……。」

言ってやれ！

テメーなんかにやるメシはねーよ！と

のび子は……。じゃなくて女の子は……

「まだ出来上がってないので少し待ってて貰えますか？」
ジャイアンを迎え入れた。

……。

のび子お—————！！！！！！！！！！

だめだ！

ジャイアンなんか追い返せ！！！！

「出来るまで中で待っていてください」

だめえ—————！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

のび子だめ！！！！

そんな奴中に入れちゃ

なんでそんな奴中に入れんの！？

優しそうだから？

優しくない！

優しくないよ！！！！

映画とかでたまにちよつといいことするけど

違うから！それ、違うから！！！！

普段悪い奴がちよつといいことしたから

なんかすごくいい奴に見えるだけだよ！！！！

実際は、むしろくしゃするっただけで殴って来るような奴だよ！！！！
入れちゃだm「問答無用でエリア移動」

森の中のとある小屋の中

傍若無人なジャイアンは人の家に突撃隣の晩御飯をし

「やべ、食いすぎた。なんか今なら子供産めそう。」

家主であるのび子の倍以上はメシをたいらげた。

「その〜 お口に合いましたか？」

「ああ。なかなかうまかったぞ。ありがとな。」

まあ〜

子供産めるまで食ってるからね

さぞおいしかったんでしょね

「それよりあなたは一体何者ですか？」

のび子聞くの遅い！

それ最初に聞くべきこと！！

ご飯ご馳走にする前に聞くこと！！！！

「俺か？ゼロだ。めんどくいが、いちおはゆうs」GAUUUUUUUUUUUU！！！！！！！！！！

と、勇者が自己紹介をしている途中どこからともなく雄叫びが聞こえた。

「なんだ？今の？」

女の子視点

家を出てから少し走ったところには、メガベアーの大群がいた。たぶんあの人についた仲間の匂いをたどって来たのだと思う。

どこを見渡しても くま くま くま

中には4メートルはあるであろうものまでいる。

メガベアーは仲間意識が強く集団で群れをなす

そして一匹がやられれば集団で

集団がやられればもっと多くの集団で

というように不良のような習性がある。

とても怖い

怖くて今にも逃げ出したい。

でもそんな事をすればあのゼロさんという人はこの群れに殺されてしまう。

助けなくちゃいけないんだ。

だって私は・・・

魔法使いなんだから。

ゼロ視点

なんかよくわからんが

それであのちっさい女が「私がなにかしますから。」と言って出て

行き

おいおいお前みたいなちっさいガキがどうにかできるわけねーだろ
しかたがねーか

一食の恩だ

助けてやるかなー

と、思、つ、て、外、に、出、て、あ、の、女、を、探、し、て、た、ら、．．．

見失った。

足早いな！

あのガキ

辺りも暗いから小屋に戻る道もわかんないし

迷子？

•
•
•
○

まさかな

俺が迷子なんてありえないだろ

తుదకొనలు?

A
めんどい寝る

B
めんどい寝る

Ｃ
めんどい寝る

D
めんどい寝る

ちーと

どれにするかな？

いじはこの寝るにしようk GAUUUUUUUUUUUUUUUUUUUU

UUU! ! ! ! ! ! ! ! ! !

おいおい真後ろから聞こえたよ

俺、逆方向に走って行ったの？

無駄な体力、消費しちゃったなー
めんどいけど・・・

やっぱりEの搜索続行でファイナルアンサー

・・・。

やる気ゼロの勇者は少しはやる気があった。

第六話 選択肢にあるものだけが正解とは限らない（後書き）

なんか女の子出てきたのはいいけど・・・

名前が出てきませんでしたね。

え？名前はのび子じゃないの？

違います。

断じて違います。

あと

一つ気になることがあるんですけど

この小説のお気に入り登録が2になってるんですけど

逆お気に入りユーザー一覧が（0）になってるんですよ。

これってどういうことなんですか？

あまりにも人気がなくてかわいそうだから運営様が情けで2にしてくれたんですか？

それとも俺が勘違いをしているだけですか？

そこん所を誰か教えてくれると嬉しいです。

ってかこれ見てる人いるのかな？

。。。 （泣）

それでは

さようなら！

第七話 己の価値は自分でつけるものではなく他者につけてもらうもの

森の中 女の子side

私の父は賢者、母も有名な魔法使いだった。

そんな二人の間の子だから私は生まれつき魔力が高かった
その娘とあって、恥がないよう

毎日、毎日がむしゃらに魔法の勉強をした。

私が十歳になる頃

事件が起きた。

私の魔力が父と母を超えてしまったのだ。

父と母は私をほめてはくれなかった。

父と母は私を怖がった。

しだに私の住んでいた町の人々も私を怖がった。

私は独りになった。

ついに私は

父と母に

住んでいた村に

捨てられた。

私は捨てられた。

最初は意味がわからなかった。

いきなり父に「お前なんていらない」と言われた。

母には「あなたなんて産むんじゃない」と言われた。

村人には「恐ろしいからこっちに来るな」と言われた。

私はみんなに否定された。

私は思った

「私は知らない子なんだ」

私は私自身にも否定された。

私は村から出て

この森に住むことにした。

私の存在価値はコレ（魔法）しかない

危険な目に合うのは初めてじゃない

大丈夫

きっと勝てる

私は私の存在価値を賭けて・・・

戦う！！！！

地の文 side

デカイくまが女の子に向かって飛びかかっている

あんなデカイくまに押し掛けられればこんな小さい女の子なんて潰されて死んでしまう。

しかし

女の子は押し潰されなかった。

くまは突然燃えあがり灰となった。

おそらく彼女は魔法を使っただろうが
まったくそんなそぶりは見せなかった。

魔法を使う際必要なのはいろいろあるが
その中で最も重要とされるのが

【詠唱】だ

詠唱とは簡単に言ってしまうえば

これからどんなものを使い、あることを起こしますよ
といった宣言のようなものだ。

たとえば

今のようにくまを燃やす際は

《私は今から火を使います

火力は全てを灰に帰す程のものを

範囲はくま一匹》

というようにかなりめんどくさい宣言（下準備）をしたのちやつと
《くまが燃える》という現象を起こせるのだ。

しかし彼女はそれをしなかったのだ。

つまりは

【無詠唱】

無詠唱などは大賢者と言われる世界に数えるほどしかない者にのみ
使用できるものだ。

詠唱をするということは何万桁もある計算を筆算するのと同じで
めんどくさいが精度は高い。

逆に

無詠唱は暗算

めんどくさくはないが精度にかけるのだ。

魔法での計算ミスは魔力の暴発を意味する。

魔力が暴発すれば魔法は発動しないし最悪、死の危険性もある。
だから自らの力に相当な自信がなければやらない。

彼女は長さ十五センチ程の指揮棒のような杖をとりだしそれを右から左に流れるように動かす

すると辺りにいた多くのくま達が燃えあがり灰となる。

ほとんどが灰になり死体すら残っていない。

その時いきなり背後からくまが襲つてきた。女の子は突然のことに対処できなかった。

それは獲物を仕留めたときだ。

それを仕留めたときの安心感と達成感

彼女はまさにそれだった。

それを持ち切った安心感でいっぱいになり

無詠唱というのは言葉に発さないだけで

頭の中で計算式を組み立てているのだ

ただの体当たりだったから致命傷にはなかったが

意識が朦朧とする

これではもう魔法なんか使えない
くまは止めを刺そうとしているのか
さらに襲いかかって来た
そして・・・

くまは真つ二つになった。

「Eにしといて正解だったみたいだな。」

女の子side

意識がくらくらして集中できない
突然後ろからくまが襲いかかって来たが私は突然のことに対応が
出来なかった。

どうやら私はたった一つの私の存在価値も守れないようです
ここで私は死ぬ

そう思った時目の前に黒いマントが横切った。

「Eにしといて正解だったみたいだな。」

おい、大丈夫か？

一食の礼だ

助けてやる。」

そう言つて私に手を差し伸べてくるのは先ほどの男性だ
名前は確かゼロさん

助ける？わたしを？なぜ？

私なんかに助けられる価値なんてありませんよ

私は両親にも

村の人たちにも

自分にすら

否定されたんですよ？

そんな私を助ける？

だめだ

この人が危ない

「だ、だめです。危険です。私なんかほつといて逃げてください。」
するとゼロさんは眉を少し釣りあげ怒った調子で言った。

「危ない？馬鹿にすんなよ？こんなデカイだけが取り柄のような奴らに」

この俺が！この俺様が負けるわけねーだろ？」G U A A A A A

!!!!!!

どこから湧いてきたのだろうか

またも辺りはくまで埋め尽くされていた。

「この俺に数で勝とうとしてんならこんなじゃたんねーぞ」

森の中の全員呼んで来い！

「この森のくまどもを絶滅してやつから。」

地の文
side

さすがはチート勇者である

マジでくま絶滅したんじゃない？

というくらい死骸の山々

強さだけはまさに勇者だ　ここ重要

「あのー先ほど何か言いかけているようでしたけど」

あなたは本当に何者なんですか？」と

だいぶ回復したのか

少し怖がった様子で控えめに質問をしてくる。

「俺か？俺はな

バラモスだろーがゾーマだろうがなんでもかかって来いの

最強無敵の勇者様だ」

どうやら彼にもいちおは勇者という自覚があるそうだ

「勇者様！？」

「そうだ。勇者様だ。クソめんどくせ　が魔王討伐というのを目指し旅しているんだ。」

「た、旅ですか？ですが・・・勇者様は剣以外なにも持っていないようですが？」

よくぞ突っ込んでくれた！

「だって重いじゃん荷物って。」

「重いと言っても・・・。」

それでは食事などはどうしているのですか？」

「どうするも何もな」

まだ旅して一日経ってないし

あれ？でもどうしよう？

これから俺？」

ここにきてやっと自分の愚かさに気づく馬鹿。

「うーん

いったん戻るのもめんどいし

くそー！やっぱ荷物持ちと料理人はパーティに入れておくべきだった。

どこかにサンジみたいに料理のうまいやつh・・・。」

「な、なんでしょうか。ゆ、ゆ、勇者様！私の顔なんかをじつと見

て」「お前だ！」

「え？」

「お前の料理はうまかった。」

「そ、そんなことは・・・。／＼／」

「そこで！お前の腕を見込んで俺のパーティーに料理人として入れる！」

「え？ええー！？わ、私なんかをですか？

そんな私なんかが勇者様のパーティーに入れてもらえるなんて」

「だまれ！」

「お前に拒否権はない！」

俺はお前の料理の味が入った

だからお前は自分に自信を持って俺のパーティーに入れ」

さすがはジャイアン

傍若無人ぶりでは彼の右に出る者はいないだろう。

「それとお前の名はなんだ？」

「は、はい！ペスイ・ミスティクです。」

「ペスイだな。」

おいペスイ！お前に初仕事をやる」

「は、は、はうい！」 噛んだ

「今の戦いで疲れて腹後減ったから何か作れ」

断れ！断るんだ！！のび子おーーーーー！！！！

彼女は一瞬困った顔をしたが笑顔で返事をした。

「少々時間がかかりますがよろしいですか？」

・・・。

やる気ゼロの勇者のパーティーに料理人（魔法使い）が仲間に入っ
た。

第七話 己の価値は自分でつけるものではなく他者につけてもらうもの

(後書

やっと女の子の名前がわかりましたね。

名前の由来は英単語《pessimistic

悲観的な》から

うまい具合に名前になるように切っただけです。

適当すぎですみません。

言い訳を！言い訳を言わせて下さい！

日本人ならまだしも

外人ですよ！

私に外人キャラにちゃんとした名前を付けるスキルなんて持ち合わせていないんですよ！

すみません。

そしてペスイちゃんですが例の如く

私の残念な文才のせいで想像しにくでしょう。

そこで！

またも絵にしてみましたー

「みてみん」様に投稿するので

よろしかった見てみてください。

それでは

さようならー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6189n/>

やる気ゼロの勇者物語

2010年10月31日01時13分発行